

## PROGRAM

エアスコープ III (マリンバとティンパニー)	松下 功 <日本初演>	ファ・ファ・ファゴネ	ジュラル・ネルソン
竹林	安倍圭子	マリンバ・スピリチュアル (マリンバとバーカッション)	三木 稔 <日本初演>
ウッドランミュージック (2台のマリンバ)	R・オミューラー	ラグタイムより	安倍圭子編曲
パズル (マリンバとテープ)	ジェラール・ジェ	トリプレット ジョージ・ハミルトン・グリーン ジ・エンターテイナー スコット・ジョブリン	
道	安倍圭子	メープルリーフ・ラグ	"

● 10月9日(水) PM 6:30  
阿田田美江さん・小林さん  
● 10月8日(火) PM 6:30  
佐藤勝子さん・小林さん

安东尼王子对日本古代美术之国粹的研习，以及其对美術之研究。首先，对于日本古物之研究，是通过他在京都大学学习时所接触的日本古物学教授藤原秀宣先生之教导而开始的。藤原先生是日本古物学的先驱者之一，他对于日本古物学的研究有着深远的影响。藤原先生在讲授日本古物学时，特别强调了日本古物学与日本历史、文化、艺术之间的密切关系。他认为，要真正理解日本古物，就必须将其置于日本历史、文化、艺术的背景中进行研究。因此，他在讲授日本古物学时，常常引用大量的日本古物学文献，如《日本古物考》、《日本古物志》等，以帮助学生更好地理解日本古物。同时，他还鼓励学生亲自到日本古物博物馆进行实地考察，以便更直观地了解日本古物。在他的指导下，安东尼王子对日本古物学产生了浓厚的兴趣，并在此基础上进行了深入的研究。他的研究成果在学术界引起了广泛关注，成为日本古物学研究领域的一位重要学者。

(三六七二) 壬 丑 雜 論

卷一



安倍圭子  
マリンバ・リサイタル

三

ミハエル・ド・ロー  
ハンス・ゾンドロフ  
ヨーナルド・アンツ

## プロフィール

### ミハエル・ド・ロー

オランダ・ハーグ生まれ。ハーグロイヤル音楽学校卒業。スティーブ・ライヒ等と共にアンサンブル作品やオペラの初演、室内楽で活躍するかたわら、自ら作曲や指揮も手がけ、テレビ番組の音楽担当などもしている。オランダバレエオーケストラで10年間ティンパニーのソリストを務めた後はオランダの室内楽に積極的に参加するようになり、現在、サークルアンサンブルを創立、運営にたずさわっている。また、ソリストとして活動する一方ヨーロッパをはじめ海外での演奏活動も幅広く、オランダ、ベルリン、イギリス等のフェスティバル出演も多い。サークルアンサンブルを率いて東京サマーフェスティバルにも出演。日本のグループ「鼓童」との共演は打楽器の新しい道を開いた。

レコードとして、フィリップスレベルでバトルトの「2台のピアノと打楽器の為のソナタ」をマルタ・アルゲリッチと吹き込んでいる。

### ハンス・ゾンドロフ

オランダ・リーデン生まれ。幼少の頃よりショーバンドで打楽器の演奏をしていた彼は13歳の時に地元の音楽学校でティンパニー、小太鼓、ビブラフォンの勉強を始めた。高校卒業後ユトリヒト音楽学校に入り、ミハエル・ド・ロー氏、ゴードン・ステン氏、安倍圭子氏の教えを受け、博士号を取っている。

在学中から、サークルアンサンブル、ラジオウインドアンサンブル、オランダショナルユースオーケストラ、オランダバレエオーケストラ、オランダフィルハーモニック等で活躍するかたわら、ソリストとして、また、室内楽奏者としても高い評価を得ている。

### ローナルド・アンツ

若くしてドラムバンドやブラスバンドでバーカッションを演奏していた。ロンドンのロイヤルアルバートホールで毎年10月に開かれる英国ブラスバンドの祭典でもドラムソロを担当している。15歳の時、オランダのテレビ局の招きにより、13ヶ国でドラムソロコンサートを行った。高校卒業後、ユトリヒト音楽大学でミハエル・ド・ロー氏、安倍圭子氏に学び、地方の音楽学校で教鞭をとりながら2年間、オランダショナルユースオーケストラに参加。アムステルダムのサークルアンサンブルのメンバーでもあり、1984年の鼓童との共演をはじめ多くのコンサートに出演。ソリストとして、また、アンサンブル奏者として大きな期待を寄せられている打楽器奏者である。

### エアスコープⅢ

1984年11月 パリのポンビドゥーセンターで開かれたバーカッションフェスティバルにおいて安倍圭子さんの委嘱で作曲したテープとマリンバのための「AIRSCOPE Ⅲ」が初演された。この作品は、その題名が示すごとく空気、風、調べの広がり、あるいは範囲を意味しているが、ここではそれに加え演奏者の呼吸を意識し、即興的要素を多く取りいれた。即興性を作品に取りいれることについて、私は作者と奏者の信頼感そして2者の呼吸が一帯となって始めてなりたつものであると思う。安倍さんは私の世界を十分に理解し、まさに作者と息のあった演奏であった。「AIRSCOPE Ⅲ」に続くマリンバとティンパニーのための「AIRSCOPE Ⅳ」は安倍さんの演奏と共に演奏の視覚的要素をもっと意識した作品である。2人の奏者の音と動きのリフレクション(演奏行為のすべての要素を含んだ)により、無機質の「AIR」(息)を有機的な作品に構成しようと考えた。

### 竹林

早朝の竹の林の静寂の中に身をおいた時、そこには風の歌と、竹の葉が重なりあって生じる美しい音があった。中間部に於いて、マレットの柄を音板にあてる事により、それに近いひびきを楽しんでみた。低音の音群にさえられて、スティッキング(手順)を生かしたメロディーが断片的によりはっきり浮き上るように考えた。(安倍圭子)

### ウッドダン・ミュージック

メロディックな序奏の後、リズミックなパターンが第二奏者により奏され、その上にマリンバの倍音を生かしたハモニーが第一奏者により展開される。

序奏部のメロディーがリズムを変え、拡大され、自然にマリンバの持つ木質のひびきの中に集約されていく。第一、第二奏者のリズムパターンを少しずつ変えていく事により微妙な音色の変化と独特な美しいひびきが作り出されていく。

### パズル

1975年安倍圭子の為に作曲された「パズル」は「一人、または複数の器楽奏者のための遊びの提案」と副題されている通り、かなり演奏の任意性が前提となる作品で、作曲プロセスにおいてスケッチと云えるような断片的記譜を奏者の選択により連結したり、配合したりしてイメージーションで曲を完成させなければならない。

音高と音階が規定され、音強も部分的に指示されているが、テンポ持続、密度、ダイナミックス等はきわめて自由で、今回は安倍が一人の演奏者のバリエーションをテープ録音し、さらにそれに会場演奏を重ねる、という方法をとっている。

### 道

タイトルの「道」の意味は、人それぞれに与えられている、各自のあゆむべき異なった道の事では東洋思想に於ける宇宙の「真理」に通じる意味の道である。

序奏部分は即興から入り、自然にメロディックな第一主題へと移行していく。トレモロを使わずにメロディーがレガートに浮き上がって聴こえるようなマリンバの奏法を駆使し、また、マリンバの豊かな響きを保てるよう低音の持続音を配慮した。(安倍圭子)

### ファ・ファ・ファゴネ

1983年、安倍圭子のためにイギリスの作曲家ネルソンが作曲したものである。

足首にインド鉗、手首にカシンをつけ、足、手のリズムが音符に定着させてあり、マリンバの音楽を作る上で重要な要素となっている。

マリンバの為の作品としてはシアターピースに属する作品で、複雑なリズムから生ずる身体の動き自身が舞踏を感じさせる。

ファ、ファ、ドレミのテーマがリズムパターン、音群パターンの変化にともない現代風なエネルギーとなって躍動されていく。

1984年秋のアメリカツアー、パリのポンビドゥーセンターに於ける安倍の世界初演により大好評を得た作品である。

### マリンバ・スピリチュアル

私がマリンバの時とマリンバ協奏曲をつづけて書いた60年代の終わり頃は、まさにマリンバの黎明期でした。それが、安倍さんの燃えるような情熱に導かれて、アメリカ、そしてヨーロッパに拡がり、私など他の仕事で行く機会にも、欧米の奏者たちがコーチや楽譜にサインをせがまれるのに驚いています。二作とも海外での上演頻度の方が日本でよりもるかに多いなんて、作曲當時想像もしていませんでした。

その後、邦楽器そしてオペラの仕事が激しくて第三作が延び延びになりマリンバ・スピリチュアルが作曲できたのは、マリンバ協奏曲のあと実に15年を経た1984年でした。同年3月18日、アムステルダムのコンセルトヘボーホールにて安倍さんとNSA(アムステルダム打楽器合奏団)によって世界初演されると、直ちに欧米を火の如く駆け廻り、この3年の間に安倍さんが協演したいくつもの打楽器グループの中から、サークル・アンサンブルという素敵な合奏団の来日に合わせて、遂に日本初演が聞かれます。後半は「巨火」という曲でも採用した秩父屋囃子が違った形で現れます。それが、そのマリンバとの焰の道行を今からわくわくしながら待っているところです。

それにつけても安倍さんのマリンバへの献身と外国の誰もが世界一と尊敬する並優れた力量が、国内でもっと評価され、安定した演奏生活が保証されないものでしょうか。

### ラグタイムより

ラグタイムとは初期のジャズの総称であり、すなはち1915年以前のジャズとよばれる以前のジャズのことである。この時代を代表する作曲家にスコット・ジョブリンがいる。

今日はこの時代から安倍圭子が三曲を選び四人のマレットプレイヤーのために編曲している。

一曲目の作曲家、ハミルトン・グリーンは1930年代のアメリカを代表する木琴奏者で、多くの木琴の為の作品及びエチュードを残している。この時代のリズムをたくみに木琴に生かし、軽快かつ美しい木琴の作品として作曲されている。多くの奏者から愛されているこの曲は、ことにカナダの打楽器グループ「ネクサス」の重要なレパートリーの一つである。三連音符が効果的な木琴の世界をつくっている。

二曲目の「ジ・エンターティナー」及び三曲目の「メープルリーフ」は、スコット・ジョブリンの代表作としてなじみが深い。今回は「ジ・エンターティナー」から有名なテーマの部分のみを使用しており、「メープルリーフ」はドラムセットを加え、初期のジャズスタイルのなごりを残して編曲されている。

## 松下功

### R・オミューラー

メロディックな序奏の後、リズミックなパターンが第二奏者により奏され、その上にマリンバの倍音を生かしたハモニーが第一奏者により展開される。

序奏部のメロディーがリズムを変え、拡大され、自然にマリンバの持つ木質のひびきの中に集約されていく。第一、第二奏者のリズムパターンを少しずつ変えていく事により微妙な音色の変化と独特な美しいひびきが作り出されていく。

### シェラール・ジエ

1975年安倍圭子の為に作曲された「パズル」は「一人、または複数の器楽奏者のための遊びの提案」と副題されている通り、かなり演奏の任意性が前提となる作品で、作曲プロセスにおいてスケッチと云えるような断片的記譜を奏者の選択により連結したり、配合したりしてイメージーションで曲を完成させなければならない。

音高と音階が規定され、音強も部分的に指示されているが、テンポ持続、密度、ダイナミックス等はきわめて自由で、今回は安倍が一人の演奏者のバリエーションをテープ録音し、さらにそれに会場演奏を重ねる、という方法をとっている。

### 安倍圭子

タイトルの「道」の意味は、人それぞれに与えられている、各自のあゆむべき異なった道の事では東洋思想に於ける宇宙の「真理」に通じる意味の道である。

序奏部分は即興から入り、自然にメロディックな第一主題へと移行していく。トレモロを使わずにメロディーがレガートに浮き上がって聴こえるようなマリンバの奏法を駆使し、また、マリンバの豊かな響きを保てるよう低音の持続音を配慮した。(安倍圭子)

### ジュラル・ネルソン

1983年、安倍圭子のためにイギリスの作曲家ネルソンが作曲したものである。

足首にインド鉗、手首にカシンをつけ、足、手のリズムが音符に定着させてあり、マリンバの音楽を作る上で重要な要素となっている。

マリンバの為の作品としてはシアターピースに属する作品で、複雑なリズムから生ずる身体の動き自身が舞踏を感じさせる。

ファ、ファ、ドレミのテーマがリズムパターン、音群パターンの変化にともない現代風なエネルギーとなって躍動されていく。

1984年秋のアメリカツアー、パリのポンビドゥーセンターに於ける安倍の世界初演により大好評を得た作品である。

### 三木 稔

私がマリンバの時とマリンバ協奏曲をつづけて書いた60年代の終わり頃は、まさにマリンバの黎明期でした。それが、安倍さんの燃えるような情熱に導かれて、アメリカ、そしてヨーロッパに拡がり、私など他の仕事で行く機会にも、欧米の奏者たちがコーチや楽譜にサインをせがまれるのに驚いています。二作とも海外での上演頻度の方が日本でよりもるかに多いなんて、作曲當時想像もしていませんでした。

その後、邦楽器そしてオペラの仕事が激しくて第三作が延び延びになりマリンバ・スピリチュアルが作曲できたのは、マリンバ協奏曲のあと実に15年を経た1984年でした。同年3月18日、アムステルダムのコンセルトヘボーホールにて安倍さんとNSA(アムステルダム打楽器合奏団)によって世界初演されると、直ちに欧米を火の如く駆け廻り、この3年の間に安倍さんが協演したいくつもの打楽器グループの中から、サークル・アンサンブルという素敵な合奏団の来日に合わせて、遂に日本初演が聞かれます。後半は「巨火」という曲でも採用した秩父屋囃子が違った形で現れます。それが、そのマリンバとの焰の道行を今からわくわくしながら待っているところです。

それにつけても安倍さんのマリンバへの献身と外国の誰もが世界一と尊敬する並優れた力量が、国内でもっと評価され、安定した演奏生活が保証されないものでしょうか。

### 安倍圭子 編曲

ラグタイムとは初期のジャズの総称であり、すなはち1915年以前のジャズとよばれる以前のジャズのことである。この時代を代表する作曲家にスコット・ジョブリンがいる。

今日はこの時代から安倍圭子が三曲を選び四人のマレットプレイヤーのために編曲している。

一曲目の作曲家、ハミルトン・グリーンは1930年代のアメリカを代表する木琴奏者で、多くの木琴の為の作品及びエチュードを残している。この時代のリズムをたくみに木琴に生かし、軽快かつ美しい木琴の作品として作曲されている。多くの奏者から愛されているこの曲は、ことにカナダの打楽器グループ「ネクサス」の重要なレパートリーの一つである。三連音符が効果的な木琴の世界をつくっている。

二曲目の「ジ・エンターティナー」及び三曲目の「メープルリーフ」は、スコット・ジョブリンの代表作としてなじみが深い。今回は「ジ・エンターティナー」から有名なテーマの部分のみを使用しており、「メープルリーフ」はドラムセットを加え、初期のジャズスタイルのなごりを残して編曲されている。